

FREE PAPER

自由に生きたい
女性のための
フランスの本

Livres
français et
en français,
libres et
égalitaires

フランス大使館からあなたへ



アンスティチュ・フランセと在日フランス文化機関ネットワーク

L'IFJ ET LE RÉSEAU CULTUREL FRANÇAIS AU JAPON

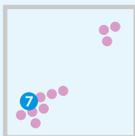
アンスティチュ・フランセ日本は、フランス政府公式の文化機関です。東京・横浜・京都・大阪・福岡・沖縄に拠点を置き、フランスの文化、学問、芸術、思想を広く発信しています。

フランス語講座は、グループレッスン、プライベートレッスン、通学でもオンラインでも受講可能な選べるレッススタイルで、入門・初級から上級レベルまで幅広く対象とし、「総合フランス語」「会話」「補足強化」「文化講座」「ビジネスフランス語」「キッズ・ジュニア講座」「資格試験対策」など質の高い多彩な講座を取り揃えています。その他、映画やコンサート、舞台芸術、講演会、展覧会などの文化イベントが一年を通じて開催され、最新のフランス文化を紹介しています。フランスの書籍やDVDなどの豊富な資料を自由に閲覧できるメディアテーク、カフェやレストランが併設され、まさに日本におけるフランスを体現しています。

INSTITUT FRANÇAIS

フランス政府公式機関

- 1 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本
Ambassade de France/Institut français du Japon
〒106-8514 東京都港区南麻布4-11-44 フランス大使館内
- 2 アンスティチュ・フランセ東京 Institut français du Japon-Tokyo
〒162-8415 東京都新宿区市谷船河原町15
tokyo@institutfrancais.jp tel. 03-5206-2500
- 3 アンスティチュ・フランセ横浜 Institut français du Japon-Yokohama
〒231-0015 横浜市中区尾上町5-76 明治屋尾上町ビル7階
yokohama@institutfrancais.jp tel. 045-201-1514
- 4 アンスティチュ・フランセ関西 Institut français du Japon-Kansai
【京都 KYOTO】
〒606-8301 京都市左京区吉田泉殿町8
kansai@institutfrancais.jp tel. 075-761-2105
【大阪 OSAKA】
〒530-0041 大阪市北区天神橋2-2-11 阪急産業南森町ビル9階
kansai.osaka@institutfrancais.jp tel. 06-6358-7391
- 5 ヴィラ九条山 Villa Kujoyama
〒607-8492 京都市山科区日ノ岡夷谷町17-22
contact@villakujoyama.fr tel. 075-761-7940
- 6 アンスティチュ・フランセ九州 Institut français du Japon-Kyushu
〒810-0041 福岡市中央区大名2-12-6 ビルF
kyushu@institutfrancais.jp tel. 092-712-0904
- 7 アンスティチュ・フランセ沖縄 Institut français du Japon-Okinawa
〒900-0015 沖縄県那覇市久茂地2-15-3 嘉栄産業ビル5階
okinawa@institutfrancais.jp tel. 098-975-7501



TOKYO 日仏会館・フランス国立日本研究所 IFRS-MFJ
東京国際フランス学園
Lycée français international de Tokyo

KYOTO 京都国際フランス学園
Lycée français international de Kyoto



INSTITUT FRANÇAIS
vivre
les
cultures



Alliance Française
JAPON

フランス政府公認機関

- 8 札幌アリアンス・フランセーズ Alliance française de Sapporo
bureau@afsapporo.jp tel. 011-261-2771
- 9 仙台日仏協会・アリアンス・フランセーズ
Association Franco-japonaise Alliance française de Sendai
contact@afsendai.com tel. 022-225-1475
- 10 アリアンス・フランセーズ 愛知フランス協会
Alliance française Association France Aichi
afnagoya@afafa.jp tel. 052-781-2822
- 11 アリアンス・フランセーズ徳島 Alliance française de Tokushima
aftokushima@hotmail.com tel. 088-655-8585

« Lire c'est voyager ; voyager c'est lire. »

Victor Hugo

「読むことは旅すること、旅することは読むこと」
ヴィクトル・ユゴー

男女平等と読書の振興は、どちらもフランス政府の優先課題です。フランスはフェミニスト外交・文化外交によって国際的にもこの課題に取り組んできました。現在、新型コロナウイルス感染症により、男女の不平等が広がり、女性たちの状況はより不安定になっています。旅行もできなくなり、対面での交流も制限されています。しかし、ヴィクトル・ユゴーが言ったように、「読むことは旅することであり、旅することは読むこと」です。この小冊子では、日本の著名人の方々に男女平等にかんするフランスの出版物をご紹介いただきました。コロナ禍の今だからこそ、読書を通じて豊かな世界を発見していただければと思います。

2021年12月10日
フランス大使館文化参事官、アンスティチュ・フランセ日本代表
ステファヌ・マルタン

Sylvia La Ron
de Beauvoir

シルヴィー・ロン・ド・
ボーヴォワール
(ボーヴォワールの養女・哲学者)



Maiko
Kishi
岸 恵子 (女優)



Maiko
Oda
小田 舞子
(日経xwoman副編集長)



Mami
Miura
三浦 まり
(上智大学教授)



Chizuko
Inano
上野 千鶴子
(社会学者)



Wakako
Yatai
矢田 わか子
(参議院議員)



さまざまな分野で活躍する女性たちから メッセージをいただきました。



Akiko
Matsuo
松尾 亜紀子
(編集者・
エトセラブックス代表)

「女性としてのかけがえない経験」「女性で あることについて考えさせられた本」について、
日仏の11人の女性に聞きました。コメントとともに、本の紹介をお楽しみください。



Junko
Koshino
コシノ ジュンコ
(ファッションデザイナー)



Chihiko
Aikawa
相川 千尋
(翻訳者)



Mariko
Asabuki
朝吹 真理子
(作家)

Ayumi
Watanabe
渡邊 あゆみ
(NHKアナウンサー)



シルヴィ・ル・ボン・ド・ボーヴォワールさんに聞きました。

女性としての もっとも美しい思い出は何ですか？



Sylvie Le
Bon de
Beauvoir

1941年フランス西部レンヌ生まれ。セーヴル女子高等師範学校で学び哲学教授資格を取得。シモーヌ・ド・ボーヴォワールに手紙を書き、1960年11月に出会う。二人は26年にわたり強い絆で結ばれ、毎年ともに旅をした。その関係は、ボーヴォワールがシルヴィに献じた『決算のとき』に描かれている。1981年、ボーヴォワールの養女となる。1986年のボーヴォワールの死後、『サルトルへの手紙』(未邦訳)、『ボーヴォワール戦中日記』、『離れがたき二人』など数多くの未発表作品の刊行を手がけている。

“ La pensée libératrice de Simone de Beauvoir affirme que la liberté appartient aux femmes. ”

〇〇 シモーヌ・ド・ボーヴォワールの女性解放思想は、
選択の自由は女性に属しており、
またそうでなければならないのだと、
はっきりと述べています。 〇〇

私には、この質問に答えることができません。なぜならこの質問は、的外れな問題を提起する暗黙の了解に、つまり女性についての本質主義的な物の見方に基づいているからです。この見方は、「女性特有の本質」なるものの存在を認め、女性が「女性として」自己規定し、行動することを自明視しているように見えます。しかし、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの思想は——私も賛同する思想ですが——歴史上、そして今日でも女性を二義的なカテゴリーとして扱う、この危険な神話に対して徹底的な批判を加えています。

私が得た情報によれば、日本でも諸外国と同様、フェミニズムの重要課題に対する理解は依然として進んでいません。それらの課題は社会的なものというよりむしろ倫理的、政治的、哲学的なものと言えます。いまだに多くの男性が、女性を完全な権利を持った人間としてではなく、別のカテゴリー、他者、下位のカテゴリーとみなしています。強力な社会的圧力がこの方向に働いていて、あまりにも多くの女性の人生に影響を与えています。というのも、

女性たちは、人間である前に女性であるよう、「女性として」行動し、物事に対応するよう求められているからです。彼女たちは「女らしさ」や女性の伝統的役割、抑圧的なステレオタイプの中に閉じ込められているのです。それは、現実の彼女たちの個性にも、欲望にも、野心にも、意向にも一致しておらず、多くの悲劇を生んでいます。彼女たちの選択は尊重されているでしょうか？ 彼女たちは、自ら選ぶ権利があることを知っているのでしょうか？ 今日ではフェミニズムの中でさえ、差異主義的な人々が「女らしさ」や「男女の本質的な差異」は存在するという考えを再び採用しています。反対に、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの女性解放思想は「女らしさ」の罨を告発し、女に生まれることで運命が決まるのではなく、選択の自由は女性に属しており、またそうでなければならないのだと、はっきりと述べています。

専門家によれば新型コロナウイルス感染症により世界中で女性の地位が低下している今、このことは今日の議論にとって、非常に重要で、意義あることだと思います。

Quelle est votre plus beau souvenir de femme ?

これまで生きてきたなかで、あれはたしかに女性としてのかけがえのない経験だったと思うような、忘れられない出来事や経験、思い出があれば教えてください。

ハラスメントを受けたとき、それは自分が女性だからだったのか、それとも違う理由なのか、あるいは自分に落ち度があったのか、自分では混乱してしまうことがある。あなたが女性だったから理不尽な扱いを受けたのだと、キッパリと言い切ってくれる女友達の存在はかけがえがない。女性が尊厳を取り戻すには、ソロリテ(姉妹愛)が欠かせない。(三浦 まり)



Mari
Miura



Chizuko
Ueno

たぶん多くの女性がこれには「出産」と答えるのですが、その経験のないわたしには、大切なひとと愛し愛された記憶が、もっともかけがえのない経験です。たぶんボーヴァワールも同じ答えを言うのじゃないでしょうか。(上野 千鶴子)



Ayumi
Watanabe

娘を出産したことです。待望の女兒であることは検診でわかっていましたが、激痛が頂点に達した刹那「ああ、男の子であってほしい。この痛みをこの子に将来味わせたくない」と思ったこと忘れられません。が、それ以上に、太古の祖先から命が繋がって、この子に至ったという感謝の念に満ちたことも確かです。(渡邊 あゆみ)

まだ「フラワーデモ」という名前すら付いていなかった、性暴力の無罪判決に抗議するデモを初めて開催したとき、終了時刻になっても女性たちが#MeTooを語る声が止まらなかった。あの凍えそうに寒くて、しかし熱気に包まれていた晩の経験は忘れられない。(松尾 亜紀子)



Akiko
Matsuo

毎月来ている生理のとき、太ももに流れてゆく、少し粘性のある血液をととても美しいと思っています。白い浴室のタイルに、つーっと血液が水に混ざっておちるときに、黒スグリやラズベリージャムのような体液が排水溝に流れるのを、ぼんやりみえています。偶然女の肉体を持って生まれたことの、素朴な感想です。女性であることよる喜びで思い出すのは、十代の頃、BLと呼ばれる男性同士の恋愛ストーリーに心を奪われたことです。詳しくは、溝口彰子氏が『BL進化論』でお書きになっています。BLを読み、キャラクターたちの恋の成就を願うことが、(無自覚にですが)ホモフォビアやミソジニーを乗り越えていくことにつながり、家父長制度に抵抗する考えを自然に持つきっかけとなった気がしています。

(朝吹 真理子)



Mariko
Asabuki

「女の一大事」

私にとって出産は大事件だった。1980年、ちょうどバリコレクションの参加が始まって3回目。ノリにのっている最中突然子供に恵まれたが、それでもバリコレクションはやめなかった。日に日に変わる体形から私のコンセプトが生まれた。それは丸いお腹の中が宇宙になったこと。丸は宇宙。四角は人間が考えた合理。対極の美である。対極コンセプトは永遠なり。(コシノ ジュンコ)



Junko
Koshino

結婚すれば「誰かに異性として認められ、愛されている」ことを根拠とした自信や安心感が得られるはずだと漠然と考えていました。ですが、離婚後、女性の友人たちと穏やかな時間を過ごす中で、人に自信や安心感を与えるのは優しい人たちとの交流であって、相手が異性かどうかは関係ないのだと教えられました。(相川千尋)

Chihira
Akawa



女性としての思い出深い出来事は、何と言っても長男の出産——命の誕生の瞬間でした。一方、会社勤めの中で、女性社員が男性社員の従の立場でしかないことに疑問を持ち、人事部スタッフとして、また労働組合の活動の中で、女性の管理職登用制度や育児休業制度の導入に奮闘し、それが実現した時の達成感忘れられません。

(矢田 わか子)



Wakako
Tada

出産を3回経験しました。その後の育児・家事は「女性にしかできない」ことではありません。でも、出産(結婚)前の私は古い社会的規範を疑う視点を持ち得ていなかったため、「遠回りをしたな」と今となっては思います。コロナ下で在宅勤務が浸透し、女性の生活はさらに様変わりしていると感じます。

(小田 舞子)



Maiko
Oda



Chapitre 1

Penseuses de références

フランスを代表する フェミニスト

シモーヌ・ド・ボーヴォワールとモナ・シヨレの著作を紹介します。ボーヴォワールの『第二の性』は、今日でも正当性と現代性を失っていない、今こそ読みたい作品です。シヨレの『魔女』は、現代社会の精神とメカニズムを解き明かす著作であり、#MeToo運動のような社会運動の流れを受けたものです。どちらも、挑発的である以上に鋭い分析の書です。

Simone de Beauvoir

シモーヌ・ド・ボーヴォワール

フェミニズムが話題となるとき、女性の状況が問題となるとき、私たちがまず参照するのは、いつもシモーヌ・ド・ボーヴォワールです。自由な女性であり、思想家であった彼女は、常に書き、書くことを自らの力とし、私たち女性全体のための力としてきました。



Biographie

1908年1月パリ生まれ。若い頃から文学を志し、1926年家族の反対を押し切ってソルボンヌ大学哲学科に入学、“事実上の”夫となるサルトルと出会う。1943年に最初の小説『招かれた女』を発表。1949年に代表作となる『第二の性』で一躍注目を浴び、現代フェミニズム運動の先駆けとなるとともに、1954年、『レ・マンダラン』でゴンクール賞を受賞。フランス文壇の第一線で活躍を続けた。1966年サルトルとともに来日。日本の思想界に大きな影響を与えた。1986年没。

著者没後
34年目の新刊!



Les inséparables

離れがたき二人 関口 涼子 / 訳 2021 早川書房

20世紀初頭のパリ。少女シルヴィーは、厳格な家庭で育ちながらも自分らしく自由を求めて生きる、ある少女と出会った。互いに強く惹かれ合う二人の友愛は、永遠に続くはずだった——。1954年に執筆されるも、発表されることのない幻の小説を刊行。

『離れがたき二人』はお互いに掛け替えない存在である二人の少女の物語です。9歳で出会い、大人になる過程で一人は大学に進み、いずれは働いて自立する女性の道を歩みます。もう一人は社会階級が高いがゆえに自分の人生を生きたりできない女性の道をゆくのです。友情、愛、性について深く考え、幼い頃の自分の息づかいを感じるような作品です。



Le deuxième sexe

決定版 第二の性 「第二の性」を原文で読み直す会 / 訳 2001 新潮社

女とは何か。女と男とはどう違うのか。なぜ歴史の初めから男女という性別に序列がつけられ、女は男より劣った性“第二の性”とされているのか。男たちは法と慣習を通じて、歴史的にどう女の地位を決定したのか——女性を文化人類学、心理学、哲学、神話学、文学といったさまざまな角度から分析し、女性の置かれている立場を明快に解説した女性論の古典を、現代の感覚で新訳する。



若い時にある婦人団体の勉強会で、ボーヴォワールの『第二の性』を薦められました。難解でしたが、第一巻の1部・2部を読み終え、生物学や精神医学のみならず、文学、歴史学など幅広い領域からの鋭いジェンダー分析に驚きました。女性への差別・偏見は現在でも残っており、特に男性の意識改革の必要性を再認識しました。



La vieillesse

老い
朝吹 三吉 / 訳
2013 人文書院

老いを自己のうちに発見しながら、我々は老いることを拒否し、残された短い未来を予知する。絶望、空虚、無為、貧困、この人生の最後の時期を我々はいかに生きるのか？ 老いという呪縛に意識と行動をもって反応する人間。充溢した老いを生きるためには、若い年代にすでにその準備がなされていなければならない。



Malentendu à Moscou

モスクワの誤解
井上 たか子 / 訳
2018/03 人文書院

だけど、大人ってなんだ、それに老人ってなんだ？ 歳を取った子どもだよ。老いとは？ 長年つれそった夫婦の愛情とは？ 共産党時代のソ連への旅のなかで、ささいな誤解から生じた老年カップルの危機と和解。男女それぞれの語りが見点を交互に替えて展開される、老いをみつめた傑作小説。



ボーヴォワールの自伝的小説

ボーヴォワールは『離れがたき二人』のような自伝的小説をいくつも発表しています。最初の作品は1958年に発表された『娘時代』。続いて、『女ごかり』、『或る戦後』、『決算のとき』が出版されました。これらは1964年の『おだやかな死』へとつながる作品群です。

紀伊國屋書店出版部より、自伝4部作が翻訳出版されています。

シモーヌ・ド・ボーヴォワール / 著 朝吹 登水子、二宮 フサ / 共訳

娘時代 - ある女の回想 1961/06

或る戦後 ある女の回想 上・下 1975/03

女ごかり 上・下 - ある女の回想 1986/07

決算のとき ある女の回想 上・下 1975/04

Mona Chollet et les sorcières

モナ・ショレと魔女

魔女は、女性たちが受けた迫害の象徴であり、よく知られたフェミニズムのアイコンです。ここ数年、女性たちはこの象徴を我が物とすることで、権利を要求し、声をあげてきました。モナ・ショレは魔女の起源を説明し、現代女性に対する社会のまなざしの分析につなげています。その他、魔女たちの声を伝える書籍も紹介します。



Biographie

モナ・ショレはフランスで活躍するスイス出身のジャーナリスト。2016年から「ル・モンド・ディプロマティーク」紙の編集長。著書に「魔女」、「致命的な美」など。最新作「愛を作り直す」は2021年11月の発売以来、ベストセラーとなっている。



Sorciers. La puissance invaincue des femmes

魔女——世界の女性たちよ、結集せよ(仮題)

いぶきけい／訳
国書刊行会より2022年春に刊行予定

近年、フェミニストの間で魔女が流行している。魔女は、女性迫害の被害者であると同時に、手に負えない反逆者でもある。ルネサンス期ヨーロッパでは、さまざまな女性が魔女として迫害されたが、本書ではその中から、一人で生きる自立した女性、子どものない女性、年老いた女性を取り上げ、そうした女性に対する今日も残る偏見やイメージについて検証する。

Chihira
Aikawa



かつて魔女として迫害された女性たちは、産婆などの職業を持つ、自立した女性たちでした。本書は、力を持つがゆえに恐れられた魔女のイメージを通して、現代の独身女性、子どものない女性、年老いた女性に対する社会のまなざしを読み解き、女性の多様な生き方を肯定してくれる、フェミニズムのエッセイです。



Les Sorcières - Une histoire de femmes Céline du Chéné

図説 魔女の文化史

セリヌ・デュ・シェネ 著/文 蔵持 不三也/訳 2021/03/22 原書房

中世末から現代まで、魔女という存在がどのように認識され、表現されてきたのか。魔女に関するヴィジュアルな文化史。危険で邪悪な存在が、魅力的な存在に。この二つの魔女像は、どのように結びつくのか。魔女のイメージの変遷を、豊富な図版とともにたどる。



Moi, Tituba sorcière

Maryse Condé

わたしはティチューバ セイラムの黒人魔女

マリーズ・コンデ／著 風呂本 惇子、西井のぶ子／訳
1998/06 ウイメンズブックス

セイラムの魔女裁判についてはたくさんの研究書があるが、ティチューバに関しては、はっきりした記録は残っていない。コンデの創造するティチューバは、魔法を使う力を持ちながら魔女に徹することもできず、奴隷反乱に加担してカリブ海の伝説的な女性闘士ナニー像にかぎりなく近づくが裏切にあう。「等身大」の女を感じさせ、「読み物」としての魅力も十分な作品。フランス女性文学大賞受賞作。

日本未発売の本



致命的な美
女性の疎外の
新たな顔



自分の家
家庭内空間の冒険



愛を作り直す
家父長制は、いかにして
異性愛を破壊したか

モナ・ショレによる話題作は他にもあります。それぞれ「美しさ」、「自分の家」、「愛」という、身近なテーマに対する思い込みを粉々に打ち砕くエッセイです。



Chapitre 2

Devenir Femme

女になる

シモーヌ・ド・ボーヴォワールは「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」と言いました。私たちはどのようにして女になるのでしょうか？ 女にならなければならないのでしょうか？ この章では、ステレオタイプを解体し、さまざまな生き方について教え、子どもたちになりたいものになる勇気を与える本を紹介します。

Livres pour enfants

子どもの本

父親が子どもの世話をする本に、母親の迷いや苦悩を伝える本……
ステレオタイプにとらわれない子どもの本を紹介します。

Les métiers de Pénélope

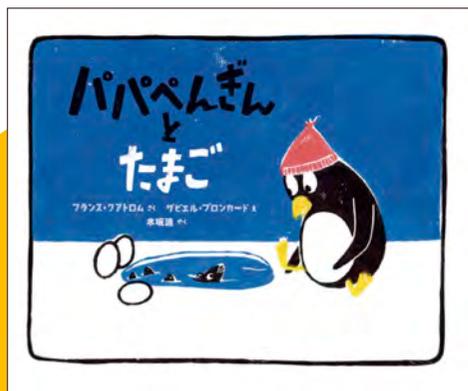
Anne Gutman
et Georg Hallensleben

ペネロペ おおきくなったら
なにになる？

アン・グットマン／著
ゲオルグ・ハレンスレーベン／絵
ひがしかずこ／訳

2019/09/12 岩崎書店

先生が聞きました。「大きくなっ
たらなにしたい？」うーん、私はお庭
でかくれんぼがしたいな。「いい
え、ペネロペ。もっと大きくなったら
よ」当てっこ遊びが始まりました。



Papa pingouin

France Quatromme
et Xavier Broncard

パパペンギンとたまご

フランス・クアトロム／著
ザビエル・ブロンカード／絵
木坂涼／訳

2017/10/14 マイクロマガジン社
パパペンギンは、ママペンギ
んからたまごを3つあずかりま
す。どこへ行くにも何をするの
も、いつもいっしょ！の、はずで
したが…



On n'est pas des poupées, mon premier manifeste féministe

Delphine Beauvois et Claire Cantais

ちいさなフェミニスト宣言
——女の子らしさ、男の子らしさのその先へ

デルフィーヌ・ボーヴォワ／著
クレール・カンテ／絵 新行内美和／訳

2014/10/01 現代書館

ジェンダーのステレオタイプを取り払い、だれもが自分らしく生
きられる社会のために。個性あふれる子どもたちのマニフェス
トをあつめた、最強のアンチ・セクシズム絵本です。



Le petit illustré de l'intimité

Tiphaine Dieumegard et Mathilde Baudy

おんなのこのからだえほん (仮題)

マティルド・ボディ／著・絵
ティフェーヌ・ディユームガール／著
良香織／監修 河野彩／訳

2022/04予定 株式会社バイインターナショナル

性器の構造や働き、性的同意、ジェンダー、セクシュアリティ、
妊娠、その他子どもが知りたい性に関する事柄について、小さ
な子どもにもわかる言葉で説明してくれる絵本。公益性が認め
られ、ユネスコ・チェア「性の健康と人権」ラベルを取得。



Maman

Hélène Delforge et Quentin Gréban

ママン

エレヌ・デルフォージュ／著
カンタン・グレバン／絵
内田也哉子／訳

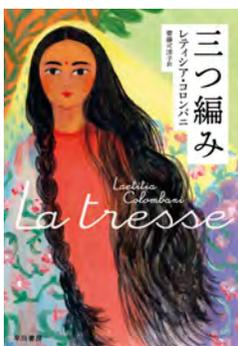
2021/04/14 株式会社バイインターナショナル

憧れ・迷い・希望・苦悩……世界中の母親の気持ちに寄り添
う世界累計24万部を超えるベストセラー。世界中の母親が子
を慈しむ気持ちや、繰り返される日々の中で奮闘する姿、母と
子のかけがえのない一瞬を詩的につづる大人の絵本。ボ
ローニャ国際児童図書展で注目の作家の美しいイラストと、
内田也哉子の愛にあふれた翻訳でお届けします。

Destins inspirants

さまざまな生き方

『三つ編み』のラリタのような、「ふつうの」女性たちが困難の中で勇気と粘り強さを発揮するとき、その生き方は、多くの人にインスピレーションを与えます。彼女たちの生き方は、マリー・キュリーのような著名な女性の生き方とも重なります。さまざまな女性の生き方を伝える本を紹介します。



LA TRESSE
Laetitia Colombani

三つ編み
レティシア・コロバンニ／著
齋藤可津子／訳
2019/04/18 早川書房

3つの大陸、3人の女性、3通りの人生。唯一重なるのは、自分の意志を貫く勇気。インド、イタリア、カナダの3人が運命と闘うことを選んだとき、美しい髪をたどってつながるはずのない物語が交差する。文学賞8冠に輝く逆境を生きる女性たちの連帯を描く傑作。



LA TRESSE OU LE VOYAGE DE LALITA
Laetitia Colombani
et Clémence Pollet

三つ編みーラリタの旅ー
レティシア・コロバンニ／著
新海知絵／訳
2021/8/18 アンドエト

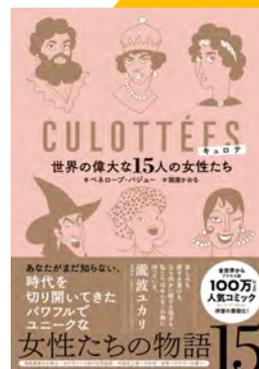
苦難に直面するインド・イタリア・カナダの3人の女性の生き様を描き、世界中で大ベストセラーになったレティシア・コロバンニの小説『三つ編み』。その中でもっとも読者に衝撃を与えたインドの母娘スミタとラリタの物語がバイリンガル絵本になりました。



LES VICTORIEUSES
Laetitia Colombani

彼女たちの部屋
レティシア・コロバンニ／著
齋藤可津子／訳
2020/06/18 早川書房

現代。ソレーヌは、困窮した女性が避難できる施設のボランティア。百年前。ブランシュは、その施設創設のため奔走する。背景の異なる人との連帯に苦労しつつ、手を取りあうソレーヌ。理解と資金を得ていくブランシュ。だが、2人の前に最後の壁が立ちちはだかる。



Culottées, Des femmes qui ne font que ce qu'elles veulent Tome 1
Pénélope Bagieu

キュロテ 世界の偉大な15人の女性たち
ベネローブ・バジュー／著 関澄かおる／訳
2020/08 DU BOOKS

ひらめき、勇気、愛と希望。周囲の目を気にせず、自身の意志を貫き、時代を革新してきた女性15人。勇猛果敢な女戦士、古代ギリシャ初の女性医師、中国史上唯一の女帝、人気キャラクターの産みの親…etc.あなたがまだ知らない、パワフルでユニークな彼女たちの人生とは!?



Culottées, Des femmes qui ne font que ce qu'elles veulent Tome 2
Pénélope Bagieu

キュロテ 世界を変えた15人のスゴい女たち
ベネローブ・バジュー／著 関澄かおる／訳
2020/08 DU BOOKS

空気を読むなんてくそくらえ。“向こう見ず”で“罔々しく”、我が道を開拓した偉大なる女性たちの物語、再び!



Madame Curie
Ève Curie

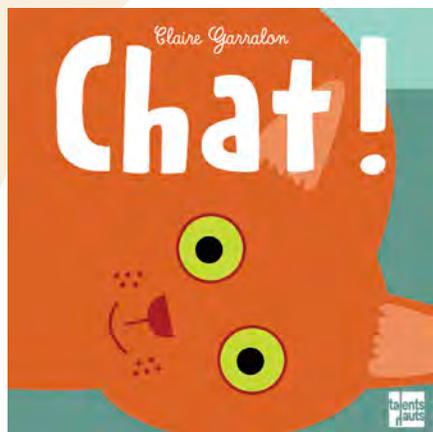
キュリー夫人伝
エーヴ・キュリー／著
河野万里子／訳
2014/07/01 白水社

「放射能」の命名者、マリー・キュリー。強い信念とたゆまぬ努力によって二度のノーベル賞に輝いた、女性科学者の比類なき生涯。没後80年、世界中で読み継がれる名著の新訳。

Pour aller plus loin

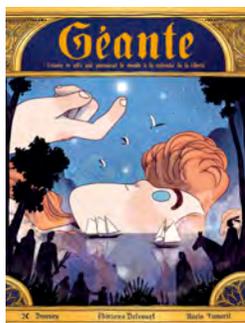
日本未発売の本

日本語に訳されていない魅力的な本は、まだまだあります。
子供の絵本とコミックを紹介します。
フランス語での読書に挑戦してもみて!



ねこ! (未邦訳)
クレール・ガラロン／著
子どもと猫のお話を通して
「同意」について考える絵本。

Chat !
Claire Garralon
Editions Talents Hauts 2021



巨人の女の子の物語 (未邦訳)

ジャン=クリストフ・ドゥヴネ／著
ニュリア・タマリ／絵

巨人の女の子が自由を求めて
世界を旅する物語。
他者との違いによって生まれる軋轢、
戦争の不条理、愛と自由を語る
フェミニスト・コミック。

Géante
Jean-Christophe
Deveney et Nuria Tamarit
Delcourt 2020



アニエス (未邦訳)
ペリーヌ・ボナフォ／著
ジェニファー・ブロン／絵

フランスを代表する女性映画監督、写真家、
アーティストであるアニエス・ヴァルダの生涯を
伝える絵本。

AGNÈS
Perrine Bonafos et
Jennifer Bouron
Agnès Perrine etc.
Les confettis 2020



ママっておうちみたい (未邦訳)

オロール・ブチ／著

ママって鳥の巣みたい、ママって乗り物みたい……
赤ちゃんの成長を見守るママの日常を短いフレーズの
繰り返しとイラストでつづる絵本。

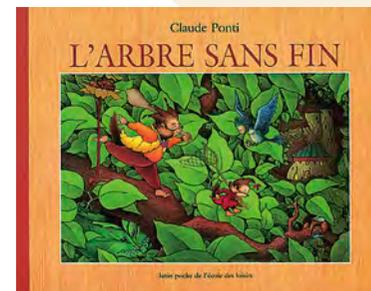
**Une maman c'est comme
une maison**
Aurore Petit
Les fourmis rouges 2019

はてしない木 (未邦訳)

クロード・ボンティ／著

終わりも始まりもない、
巨大な木に住むイボレーヌの
冒険と成長の物語。
著者はフランスを代表する絵本作家。

L'Arbre sans fin
Claude Ponti
L'école des loisirs 1992



おはな姫と黄金の馬 (未邦訳)

フィリップ・ユージー／著

昔ばなしにひそむステレオタイプを
明らかにするポップアップ絵本。

**La Princesse flore et son
poney bouton d'or**
Philippe UG
Les Grandes personnes 2016



Chapitre 3

Être femme

女であること

この章では、人生のさまざまな段階にある女性たちに、たくさんのアドバイスを与えてくれる作品を選びました。また、アニー・エルノー、マルグリット・デュラス、フランソワーズ・サガンといった、フランス文学における偉大な女性作家たちの作品も紹介します。彼女たちの作品は、男女のステレオタイプを打破し、新たな女性像を提示しています。

Les âges de la vie

人生のさまざまな年代

人生の中で、女性はさまざまな年代を経験します。

どの年代にも、多くの疑問や問い直しがつきものです。

女性の人生における困難な時期を支えてくれる本を紹介します。



50 ans et alors ?

Régine Labrosse

フランス式！

幸せの魔法を手に入れる 輝きの手引き
人生の折り返し、心も体もラクになる

レジーヌ・ラボロス／著

丸山 有美／訳

2019/6/11 双葉社

著者は20代から華々しいキャリアを築いてきたが、50歳を目前にした数年間の私生活では、離婚、父の死、子どものいじめ、恋人との別れなどが重なり、人生の目的と自信を喪失する。しかし、あることで回復のきっかけを掴み、その後の人生が一変する。本書は、そんな著者の経験から人生で直面する困難を切り抜け、きらめきを手にする“輝きの手引き”を紹介する。



Mon corps après bébé

Bernadette de Gasquet

産後の身体を守る

ペリネのエクササイズ&サポート

ベルナデット・ド・ガスケ／著

シャラン山内由紀／訳

2021/09/01 メディカ出版

「産後の身体」を保護しながら、筋肉を再構築するための具体的なケア、ペリネ（骨盤底筋群）のエクササイズ、日常生活での正しい姿勢や動作、夫婦生活再開時の注意点やポイントなどが、医学的根拠とともに豊富なカラーイラストでわかりやすく解説されている。助産師の産後指導に役立つ！



Le conflit la femme et la mère

Elisabeth Badinter

母性のゆくえ

—「よき母」はどう語られるか—

エリザベート・バダンテール／著

松永りえ／訳

2011/3/1 春秋社

母性愛は本能ではないことを論証したベストセラー『母性という神話』から30年。哲学者である著者が、母性がイデオロギー化される現代事情を分析し、ヨーロッパで比較的高い出生率を誇るフランス人の母親観にヒントを見いだす、画期的な書。



Les jeunes femmes de 50 ans

Mylène Desclaux

大人が自分らしく生きるために

ずっと知りたかったこと

ミレーヌ・デクロー／著

吉田 良子／訳

2020/06/05 ダイアモンド社

親世代よりずっと若いあたらしい50代の生き方。等身大の50代女性の悩み、喜び、さまざまな生き方のティップスをつづってフランスで大人気となったブログから生まれた本。自分を受け入れて、賢く対処すれば、人生はまだまだ、いえ、今だからこそ楽しめることがいっぱい！（そう、恋だって！）世界中の女性たちへのエールに満ちた、大人のバイブル。

Le corps

身体

欲望する身体、「ノン」と言う身体、満たされた身体。

女性たちはさまざまな身体を生きています。

女性の身体、欲望、病をテーマとした本を紹介します。



Jouissance Club: Une cartographie du plaisir

Jüne Plä

あなたのセックスに
よらしく

ジュン・ブラ／著
吉田 良子／訳

2021/06/1 CCCメディアハウス

本書は「セックスは他者同士が体で行う最も親密な行為。だから、相手の心と体に敬意を持たなくてはならない」という基本姿勢のもとで書かれた、自分とパートナーの体と心をもっと深く知るためのガイドブックです。



Femme désirée, femme desirante Daniel Flaumenbaum

なぜ私たちは飲べないの?
セックスの快楽と抑圧

ダニエル・フロメンボーム／著
松永りえ／訳

2010/01 春秋社

本書は、ベテラン産婦人科医であり、精神分析と鍼医療に通じる著者が、「欲望し、欲望される主体」となるべく、女性に熱いエールをおくる一冊。罪悪感やタブーの意識はどこからくるのか。母性はよいものとされるのか、快楽の追求はなぜないがしろにされるのか。さまざまな足枷から解放されて、新しい世界をひらくために知っておくべき大切なこと。



La guerre des tétons Lili Sohn

私のおっぱい戦争
29歳・フランス女子の
乳がん日記

リリ・ソン／著
相川 千尋／訳

2021/8/18 花伝社

おっぱい取ったあと、どんなタワーいれよう? 私の体、私の人生! おっぱいをめぐる、リリ流のイケてる“戦争”を描いたカラフル闘病記。“カミングアウト”ブログ開設から半年でコミック化、またたくまにベストセラーとなった「カワイすぎる乳がんコミック」。



Ma maman est une pirate Karine Surugue et Rémi Saillard

ママはかいぞく

カリーヌ・シュリュグ／著
やまもとこ／訳

2020/03/25 光文社

ぼくのママはかいぞくなんだ。何カ月もの間、ママは宝の島を目指して、かいぞく仲間と旅をしている——。表向きは海賊になったママの冒険譚。しかし実は乳がんと闘いの記録でもある。明示せずに気づかせる鮮やかな筆致が素晴らしい世界で大きな話題となった絵本。

Les grandes figures féminines de la littérature

フランス文学の偉大な女性作家たち

自由に、のびのびと生きた女性作家たちによる、力強い文学作品を紹介します。

Françoise Sagan フランソワーズ・サガン

1935-2004 カジャルク生まれ。19歳の夏に、デビュー作『悲しみよ こんにちは』が批評家賞を受け、一躍フランス文壇の寵児になる。その感性をモーリヤックは「魅力的な小悪魔」と絶賛。1957年自動車事故で九死に一生を得る。1978年来日。小説、戯曲と著書多数。



Bonjour Tristesse 悲しみよ こんにちは

フランソワーズ・サガン／著
河野万里子／訳

2009/01/01 新潮社

セルはもうすぐ18歳。父とその恋人エルザと南仏でヴァカンスを過ごすことになる。そこで恋も芽生えるが、父のもう一人のガールフレンド、アンヌが合流。父が彼女との再婚に走りはじめたことを察知したセルは、ある計画を思い立つ……。20世紀仏文学界が生んだ少女小説の聖典を新訳。



Aimez-Vous Brahms?

ブラームスはお好き
フランソワーズ・サガン／著
朝吹登水子／訳

2009/01/01 新潮社

美貌の夫と安楽な生活を捨て、人生に何かを求めようとした39歳のポール。孤独から逃れようとする男女の複雑な心模様を描く。



Les quatre coins du cœur

打ちのめされた心は
フランソワーズ・サガン／著
河野万里子／訳

2021/12/01 河出書房新社

フランス人女性の代表として強いジャンヌ・ダルクがいる。また、『悲しみよ こんにちは』のフランソワーズ・サガン。歴史も映画も小説も中心人物であるフランス人女性は憧れの存在。美しいだけではなく、モードであり、芯が通った強い女性で、生き様がよい。例えばジャンヌ・モロー、ブリジット・バルドーなど。



Marguerite Duras マルグリット・デュラス

1914-1996 仏領インドシナに生まれる。今世紀最大の女性作家。『愛人 ラマン』でフランスで最も権威ある文学賞の一つであるゴンクール賞を受賞。『モデラート・カンタービレ』等、多くの傑作を残した。



L'Amant

愛人 ーラマンー
マルグリット・デュラス／著
清水徹／訳

1992/02/04 河出書房新社

あの青年と出会ったのは、露にけむる暑い光のなか、メコン河の渡し船の上だった。死ぬほどの欲情と悦楽の物語が、その時から始まった。



L'Amant

愛人 ーラマンー
マルグリット・デュラス／著
高浜寛／イラスト

2020/2/10 リイド社

物語が始まった時、私は15歳半だった——。1929年、フランス領インドシナ。現地のフランス人女学校に通う貧しい少女は、ある日メコン川のボート乗り場で華僑の青年と出会う。少女は金と快楽のためと割り切って関係を持つが……高浜寛による名作の世界初の漫画化。



La passion suspendue

私はなぜ書くのか

マルグリット・デュラス／著
レオポルディーナ・パッロッタ・
デッラ・トルレ／聞き手
北代美和子／訳

2014/11/14 河出書房新社

1987年のインタビュー集。デュラスが自らの生涯と作品をほぼ網羅する形で率直に語り、作家の作家自身による解説書ともいえる貴重な一冊。創作秘話や交友関係のエピソードなども満載。



『ラマン』は'92年映画の公開で話題になりました。人稱や時制が交錯し、原作は難解なのですが、デュラス本人の自伝的作品として読むと、早熟な自我、植民地での人種観、精神の庇護を求めぬ強さ、服従せず自身を主体的に生きるしたたかな女が見えてきます。シャネルもそうなのですが、大戦まで女性の地位が低かったフランスで、失うもののない階級からの出発こそ、原動力となっているのかもしれない。



Annie Ernaux アニー・エルノー

1940年生まれ。小さなカフェ兼食料品店を営む両親のもと、地方都市で育つ。ルーアン大学卒業後、結婚、出産、離婚を経験。長年教職に従事した後、1974年に作家デビュー。父を語った自伝的な『場所』でルノードール賞を受賞。つづく『ある女』で母を語り、『シンプルな情熱』では一転して自己の性愛体験を赤裸々につづって、フランスのみならず世界中でベストセラーを記録した。ストレートな文体が持ち味で、現代フランス文学界で最も注目を集めている女性作家の一人。



Hélène Cixous エレーヌ・シクスー

1937年アルジェリアに生まれる。パリ第8大学ヴァンセヌ校創立に関わり、女性研究センターを開設。同大学で女性学および文学を講じながら、小説、戯曲、エッセイなど50以上の著作を発表。エクリチュール・フェミニンの論客として注目を集める。日本語訳された著書に『メデューサの笑い』、『狼の愛——付 ジャック・デリダ「蟻』、『ヴェール』(デリダとの共著)などがある。



L'occupation

嫉妬

アニー・エルノー／著
堀 茂樹／訳
2004/05/11 早川書房



La femme gelée

凍りついた女

アニー・エルノー／著
堀 茂樹／訳
1995/08/01 早川書房

6年間つきあってきた年若い恋人と別れることにしたのは、私のほうだった。彼とはその後もときどき会っていたが、3カ月後彼から新しい恋人と共に暮らすと宣告されて、私は激しい嫉妬に苛まれる。その女のこじか考えられなくなり、どこに住むどんな女なのか、インターネットや名簿、あらゆる手段を使って特定しようとする。次第に私は狂ったようになり、攻撃的になってきて……。妄執に取り憑かれた自己を冷徹に描く表題作。

恋愛、結婚、育児、家庭のなかでわたしは凍りついていく…。現代女性の疎外状況、とくに結婚生活への失望と危機といった極めて今日的なテーマを浮き彫りにした、自伝的小説。

「昨年九月以降わたしは、ある男性を待つこと一彼が電話をかけてくるのを、そして家へ訪ねてくるのを待つこと以外何ひとつしなくなった」離婚後独身でパリに暮らす女性教師が、妻子ある若い東欧の外交官と不倫の関係に、彼だけのことを思い、逢えばどこでも熱く抱擁する。その情熱はロマンチズムからはほど遠い、激しく単純で肉体的なものだった。自分自身の体験を赤裸々に語り、大反響を呼んだ、衝撃的問題作。

Passion simple

シンプルな情熱

アニー・エルノー／著
堀 茂樹／訳
1995/08/01 早川書房



Voiles

ヴェール

エレーヌ・シクスー
ジャック・デリダ／著
郷原 佳以／訳
2020/03/25
株式会社 みすず書房



La Ville parjure ou le réveil des Érinyes

偽証の都市、あるいは復讐の女神たちの甦り

エレーヌ・シクスー／著 佐伯 隆幸、高橋 信良／訳
2012/09/01 れんが書房新社

「血」という同一性の極をめぐる、実在した出来事「感染した血液事件」を枠組に、この第一世界で現在完全に見捨てられた存在「SDF」の運命を前景にした、エレーヌ・シクスーの戯曲。



Portrait de Dora

ドラの肖像

エレーヌ・シクスー／著
松本 伊達子、如月 小春／訳
2001/09/15 新水社

『ドラの症例』として名高いフロイトの「あるヒステリー患者の分析の断片」をもとにした戯曲。



Chizuko Iwano

これなら山のようにあります。まず何といってもシモーヌ・ド・ボーヴォワール。それにフランス社会史、女性史のエリザベート・パダンテール、ミシェル・ペロー。フェミニズム理論のエレーヌ・シクスー、リュス・イリガライ、クリスチーナ・デルフィ、そしてジュリア・クリステヴァ。アーチストのニキ・ド・サンファルについては、何度も論じました。日本は訳訳大国ですから世界中の言語の書物がたくさん読めます。場合によっては英語訳のない書物も、日本語訳の方が早く読める場合があります。わたしの語学力はついにフランス語をマスターすることができなかったのが痛恨の思いですが、日本人の優れたフランス研究者や翻訳者のおかげで、これらのひびとから受けた学恩は計り知れません。

De nouvelles voix et formes d'expressions

新しい声と表現の形

小説でもバンド・デシネでも、表現の形は何であれ、本はあらゆる大胆さを許し、あらゆる題材を受け入れます。



Trois femmes puissantes
Marie Ndiaye

三人の逞しい女

マリー・ンディアイ／著
小野正嗣／訳

2019/05/23 早川書房

仏最高峰ゴンクール賞受賞。弁護士のアフリカ系ノラは、長年会っていなかったアフリカ系の父のもとに帰郷するが、最愛の弟の姿が見えず……。アフリカからヨーロッパに渡ろうとするカディ・デンバは、数々の苦難に……。芥川賞作家の翻訳で贈る、フランス文学の極北!



Le Bal des folles
Victoria Mas

狂女たちの舞踏会

ヴィクトリア・マス／著
永田千奈／訳

2021/04/14 早川書房

19世紀末、パリ。少女ウジェニーは「霊が見える」と告白したために、家族に勘当され精神病院に入れられた。そこでは女性の苦悩やトラウマが「狂気」と診断されていた。病院で行われた公開講義や舞踏会の史実を元に、社会から排除された女性たちを描いた小説。



Des histoires vraies
Sophie Calle

本当の話

ソフィ・カル／著
野崎 歓／訳

1999/10/1 平凡社

自らの人生や、その痛みを題材に作品を制作するフランスの現代アーティスト、ソフィ・カル。写真とテキストを用いて、尾行の手法で〈私〉とは何かを追求する2作品と、自伝的な表題作を収録。



Fraise et chocolat
Aurélia Aurita

苺とチョコレート

オレリア・オリタ／著
関澄かおる／訳

2019/02/14 リイド社

オレリア(24歳)・フレデリック(44歳)東京・下町——フランスからやってきた二人はこんなふうにあい合っていた。奔放で情熱的、そしてちょっぴり切ない愛の日々。フランスの女性たちの大きな共感を呼んだコミックエッセイ、初邦訳!



Idéal standard
Aude Picault

クレール パリの女の子が探す「幸せ」な「普通」の日々

オード・ピコー／著
大西 愛子／訳

2019/06 DU BOOKS

仕事は順調。でも恋愛は長続きせず、結婚は夢のまた夢。そんな「今」を生きる30代中盤、独身の女性の悩みと、これからをどう生きて行くのかを描いたフレンチコミック。

Pour aller plus loin

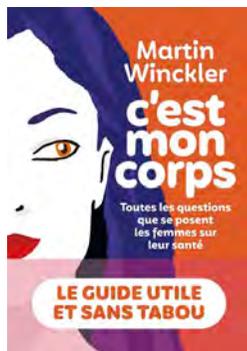
日本未発売の本

日本語に訳されていない魅力的な本は、まだまだあります。
女性の身体や悩みをテーマにしたエッセイと小説を紹介します。

これが私の体 (未邦訳)
マルタン・ワンクレール / 著

長年、産科医療に関わってきた
フェミニストの男性医師が、
生理、ビル、更年期など、
女性の身体にまつわる
さまざまな疑問に答えるエッセイ。

C'est mon corps
Martin Winckler
L'Iconoclaste 2020



リヴ・マリア (未邦訳)
ジュリア・ケルニン / 著

ブルターニュ出身のリヴ・マリアは、
ある事件をきっかけに、17歳でベル
リンへと送られる。一人の少女の成
長を通して、女性が自由に生きるこ
とについて問いかける小説。

Liv Maria
Julia Kerninon
L'Iconoclaste
2020

親愛なる姉妹たち (未邦訳)
クロエ・ドゥローム / 著

男女の支配関係を打破するために、女性の連帯「シスターフード」をす
めるフェミニズムのマニフェスト。#MeToo以降の新しいフェミニズムについて論じる。

Mes biens chères sœurs
Chloé Delaume
Points 2020



詐欺師症候群 (未邦訳)
エリザベート・カドシュ、アンヌ・ド・モンタルロー / 著

キャリアを重ねても、自分に自信を持つことが
できない詐欺師症候群 (インポスター症候群) は、
特に成功した女性に多いと言われている。
抜け出すために、自信を持つ方法をアドバイスする。

Le Syndrome d'imposture
Élisabeth Cadoche, Anne de Montarlot
Les Arènes 2021



避妊した男たち (未邦訳)

ギヨーム・ドーダン、ステファン・ジュールダン / 著 カロリーヌ・リー / 絵
避妊の負担はまだまだに女性にばかり偏っているが、なぜなのか？
答えを探すために、二人の男性ジャーナリストが、パイプカットや
男性用ビル、シリコン製避妊リングなど、さまざまな方法で自ら
避妊している男性たちに取材した。

Les contraceptés
Guillaume Daudin, Stéphane Jourdain et Caroline Lee
Editions Steinkis 2021

自分ひとりの体 (未邦訳)

カミーユ・フロドゥヴォア=メトリー / 著

著者は女性哲学者。シモーヌ・ド・
ボーヴォワールを読み直しながら、
女性の身体を、男性支配の場と、
完全な解放のための媒介という二つの
側面からとらえ直す。

Un corps à soi
Camille Froidevaux-Metterie
Le Seuil 2021





Chapitre 4

Les combats des femmes

女性たちの闘い

フェミニズムとは何かを教えてくれる本や、歴史、政治、世界における女性の地位について探究する本を集めました。フェミニズムの問題に取り組む作品は、ときに激しい怒りを表現しながら、事実を暴露し、行動を促し、世界が問題に気づききっかけをつくります。今後刊行予定のカミーユ・クシュネール『大家族』(仮題)は、そのよい例です。

Ouvrages de références

まず読みたい、闘う女性たちの作品

戦闘的なヴィルジニー・デバントから女性弁護士ジゼル・アリミまで、女性を社会の中心に取り戻そうと闘う著者たちの本を紹介します。



Légalité sans condition Réjane Sénac

条件なき平等
私たちはみな同類だと想像し、
同類になる勇気をもとう

レジャーヌ・セナック／著
井上たか子／訳

2021/04/27 勁草書房

経済的、社会的メリットになる限りでの平等？ そんな条件付きの平等はいらない。差異をもちつつ同類で平等だと認めていくために。フランス共和国の標語「自由・平等・友愛」は、実は「兄弟＝白人男性」たちが「兄弟ではない者＝非男性、人種化された者」たちへの差別を再生産する構造を隠しもつ「神話」でしかない。特異性(差異)が差別を正当化する方法を見つけ、構造を変えることで、特異性のただなかで特異性を表明しつつ、皆が同類で条件なしに平等であるあり方を探る。



Mari Miura

日本で女性活躍が謳われたとき、それは条件付きの活躍だった。女性としての特異性を活かし、利益を生むことに貢献せよ、という条件がついていた。セナックは、条件を付けずに、あらゆる人が同類として認められるユートピアに向けて、構造的な差別の撤廃に挑まなくてはならないと、私たちの背中を押してくれる。



King Kong Théorie Virginie Despentes

キングコングセオリー

ヴィルジニー・デバント／著 相川千尋／訳

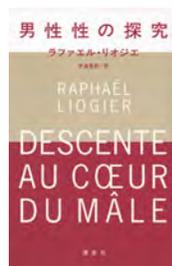
2020/11/26 柏書房

#MeToo運動をきっかけに再注目され、フランスでベストセラーとなったフェミニズムの名著。性暴力、ポルノグラフィについての独自の理論を展開するエッセイ。自分自身を、男性でも女性でもないカオスな存在としての「キングコング」に重ね、ジェンダー規範にとられない女性の在り方を、力強く、小気味いい文体で模索していく。



Akiko Matsuo

性暴力の被害に遭ったことのない女性などいないのではないかと同時に性の主体ともなれるし、この身体で生きていかなければならない。向き合う苦しさも喜びも全部ひっくるめて、強烈な当事者性で突きつけてくる一冊。



Descente au coeur du mâle Raphaël Liogier

男性性の探求

ラファエル・リオジエ／著 伊達聖伸／訳

2021/03/31 講談社

#MeToo運動をきっかけに覚えた、男性としての居心地の悪さ、動揺、そして目覚め。フランスの哲学者・宗教社会学者である著者が、男性支配の構造と、その解体を語る。



Une farouche liberté Gisèle Halimi

ゆるぎなき自由：女性弁護士ジゼル・アリミの生涯

ジゼル・アリミ、アニック・コジャン／著 井上たか子／訳

2021/11 勁草書房

アリミはボーヴォワール、シモーヌ・ヴェイユと並ぶフランスフェミニストの第一人者で、アルジェリア戦争における拷問に対する闘い、強姦の厳罰化、人工妊娠中絶の合法化、パリテ(男女同数制)の先駆となるクオータ制提案、EUにおける女性法の平等化推進などに尽力した。

Maltraitements et violences

虐待と暴力

家庭内暴力、性差別的暴力、性暴力、子どもへの虐待。どのテーマも、社会が考えなくてはならない深刻な問題です。暴力を語り、問題提起し、告発する本を紹介します。



La Démesure
Céline Raphaël

父の逸脱
ピアノレッスンという拷問

セリーヌ・ラファエル／著
林昌宏／訳

2017/09/15 新泉社

わたしの物語に耳を傾けて——。忘れてしまうべきか。赦せばよいのか。どのようにして人生をやり直せばよいのか。音楽の才能があると言われ、わたしはピアノを弾く家畜になり、父はわたしを拷問し続けた。周りの人たちは目を背けた——。お稽古地獄という虐待を生き延びた少女の告白。フランスで大反響を巻き起こし、映画化も決定したベストセラー。



Laëtitia, ou la fin des hommes
Ivan Jablonka

歴史家と少女殺人事件
レティシアの物語

イヴァン・ジャブロンカ／著
真野倫平／訳

2020/07/03 名古屋大学出版会

18歳の女性が誘拐・殺害された「三面記事」事件。だが、大規模な捜査と政治の介入によって、それはスキャンダラスな国家的事件となった。作者＝歴史家は自ら調査を進め、被害者の生の物語を語り始める。そこから明らかになる「真実」とは——。メディシス賞、ル・モンド文学賞受賞作。フランスでテレビドラマ化。



La Vraie Vie
Adeline Dieudonné

本当の人生

アドリーヌ・デュドネ／著
藤田真利子／訳

2019/11/29 東京創元社
心を病んだ弟を助けるためにどうしたらいいのか？
弟が変わるきっかけとなった事故を起こさなくすればいいのだ！ 利発な少女の試みは……？ 高校生が選ぶルノー賞、ELLE読者大賞他多数の賞を受賞した傑作。



La Familia grande
Camille Kouchner

大家族(仮題)

カミュー・クシュネール／著
土居佳代子／訳

2022/03/下旬予定 柏書房

フランスの著名な男性憲法学者が、数年にわたり義理の息子に行っていた性的虐待をその双子の姉妹である著者が告発し、大きな反響を呼んだベストセラー。事実を知りながら黙認した一家周辺の政治家らが辞職するなど、社会的にも波紋を呼び、近親姦(家庭内での性的虐待)告発が相次ぐきっかけとなった。



Rouge pute
Perrine Le Querrec

娼婦の口紅(仮題)

ペリーヌ・ル・ケレック／著
相川千尋／訳

2022/03/下旬予定 新泉社

フランスの女性詩人が、家庭内暴力や性暴力の被害に遭った女性たちに聞き取りを行い、その言葉をもとに書いた詩集。暴力の過酷さやそのメカニズム、周囲の人々の沈黙、罪悪感、司法の無理解、トラウマ、回復の希望などを、女性たちの飾らない言葉で描く。

Pour aller plus loin

日本未発売の本

日本語に訳されていない魅力的な本は、まだまだあります。
女性たちの闘いに関する本を紹介します。

地球を救うためのフェミニズム (未邦訳)

シャルロット・スラリ / 著

自然に対する支配と女性に対する支配は
同じシステムから生じており、
エコロジー政策はフェミニズムから
学ぶべきだとする
エコフェミニズムのエッセイ。

Le féminisme pour sauver la planète !
Charlotte Souлары

Les petits matins 2021



普遍的な フェミニズムのために (未邦訳)

マルティヌ・ストルティ / 著

フェミニズムはかつてないほど
必要とされているが、
極右に利用されたり、
白人中心だったり、課題も多い。
普遍的で、具体的、多元的な
フェミニズムのための
論陣を張ることが急務である。

**Pour un féminisme
universel**

Martine Storti
Seuil 2020



忘れられた偉大な女性たち (未邦訳)

ティトゥー・ルコック / 著

先史時代から現代まで、どの時代にも仕事をし、物を作り、
指導的役割を果たした女性たちはいたが、忘れられている。
歴史に埋もれた偉大な女性たちを掘り起こし、
彼女たちに声を与える本。

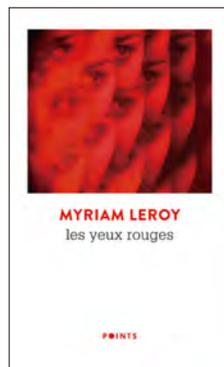
Les grandes oubliées Titou Lecop
L'Iconoclaste 2021

エコフェミニスト (未邦訳)

ジャンヌ・ビュルガール＝グタル / 著

40年前に生まれたエコフェミニズムは、女性の抑圧と自然破壊の
二つは切り離すことのできないもので、どちらも克服すべき
同じ文明モデルから生じていると主張した。
本書はこの思想のさまざまな潮流や取り組みを紹介していく。

Être écoféministe.
Jeanne Burgart Goutal
L'Echappée 2020



赤い目 (未邦訳)

ミリアム・ルロワ / 著

オンライン・ストーキング被害に遭った
女性ジャーナリストが、自らの体験を
もとに書いた小説。女性に対する
オンライン・ハラスメントの深刻さを
リアルに伝え、告発する。

Les yeux rouges
Myriam Leroy
Seuil 2019

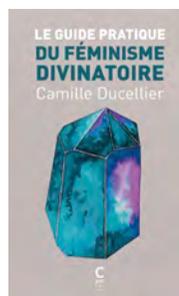


女たちの道 (未邦訳)

ミシェル・ペロー / 著

労働者など社会の周縁に生きた人々や
庶民の女性の研究を行ってきた、
フランスを代表する女性歴史家の
半世紀にわたる研究成果を集めた論集。

Le Chemin des femmes
Michelle Perrot
Robert Laffont 2019



神秘的フェミニズム 実践ガイド (未邦訳)

カミーユ・デュセルエ / 著

社会規範からはずれた感性を育む女性や、
規制秩序の崩壊を願う女性のための
フェミニズム。ラディカルフェミニズムの
合理主義からの解放と、占星術、錬金術などの
秘教的伝統の復権を訴える。

**Le Guide pratique du
féminisme divinatoire**
Camille Ducellier
Cambourakis 2018

特別寄稿

Invitée Spéciale

岸 恵子さん(女優)

人間は解放されている？



フランス大使館、アンスティチュ・フランセ日本本部から依頼された数個の質問に対して、それぞれ150字で纏める才能は私にはない。許可を頂いて思うことを書かせていただくことにした。

私が海外旅行の自由化していない日本を出奔して、医師であり、映画監督であったイヴ・シャンピに嫁ぐためパリに移住したのは、今から64年も昔の1957年のこと。

当時のパリは、「サンジェルマン・デ・プレ

の黒い人魚」ともてはやされたジュリエット・グレゴが歌い、ジャン＝ポール・サルトルが標榜した「無神論的実存主義」に湧いていた。

1972年のある時、勅使河原宏監督が製作し、好評を博した『サマー・ソルジャー』の試写の後、サルトルとシモーヌ・ド・ボーヴォワールがジャンピ家に来て下さり、昼食の後、この映画について午後一杯、大議論で賑わった。映画の主題が、サルトル、ボーヴォワールや夫の強い関心を奪ったのだった。

『サマー・ソルジャー』はベトナム戦争から脱走した兵士の逃亡の日々を描いた、人間の精神の自由について語っていた実話の映画化だったと思う。それは正にサルトルの名言「人間とは自由であり、常に自分自身の選択によって行動すべきである」を彷彿とさせた映画だったように思う。

一生の半分以上も過ごしたパリで、私は勿論、フランス文学作品に夢になった。私は私なりにフランスばかりでなくヨーロッパやアフリカで見、感じたことを著作にした。

『巴里の空はあかね雲』、『ペラルーシの林檎』の2作はエッセイ賞を受賞したが、ドキュメンタリータッチのルポ・エッセイだった。『30年の物語』では、私が出会った、「ブラハの春」での医科大学生の革命への参加と、夫と私が彼の亡命に手助けをした物語。

最終章、「ホームレスと大統領」では、誰も経験しえないような薄汚くステキなホームレスとのオツな関係を書いた。

『わりなき恋』は5年近くかけて紡いだ高齢者の恋と友情の物語。

2021年の春には『岸恵子自伝』を上梓した。このタイトルには気恥ずかしい思いをしたが、好意的な数々の書評を頂いて幸せを感じたし、本を読む人口がすさまじく減ったことにも驚いている。

今、果敢ではあったが、ドジで向こう見ずだった89年をしみじみと恋しく思う。これら拙著の中で私は、万難を承知で常に自分の選択をよしとして生きてきたことを描写した。最後に依頼された大事な項目、「第二の性」も書いたボーヴォワールの精力的な「女性解放運動」について……。

私が戸惑いを感じるのは、女性解放？ じゃあ、男性は解放されているの？ ということ。女も男もなく、人間は精神の自由に向けてもっと解放されなければならないと思う……。愚かではあっても、自分への尊敬や、しあわせをもっと追いつめて生きるべきだと思う……。

依頼された質問の中にある、「女性としてかけがえのない体験とか、女性であることを

考えさせられた本……」は私にはない。常に1人の人間としての意識しかなかった。

突飛で、不遜と思われるかもしれない例を挙げさせてもらおうと、皇室を去られて結婚された眞子さまを苦しめたという、事実とは異なる誹謗中傷……私はこれらマスメディアの記事を一切読んでいないし興味もない。言えることは、海に囲まれたこの平穏な島国には鎖国という歴史がある。閉じられた国の中で、われわれ日本人には独特の閉鎖性があるように思う。決め事から外れる人たちや事柄を嫌う、常識という救いがたい輪から飛び出すものを憎む傾向は否めなくある。卑近な例の数々は『岸恵子自伝』に率直に書いた。

女優としての私が受けたあられもないでっ上げ記事は、常軌を逸するものだった。なぜ？ 「一世を風靡するスター」になった好運を捨てて祖国を出奔した人間に課した、わが愛する同胞たちの、あまり褒められない、みっともなくも寂しい風習である。

ここで、フランス文学が私に与えてくれた興奮と影響を語りたいと思う。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの作品には心酔したが、今、私の机の上に、茶色く煤けてボロボロになった1冊の本がある。

ハイティーンだった私を夢中にさせたこの本は、ジャーナリストでもあったジョゼフ・ケッセルの著作『Le tour du Malheur』(不幸の出番)である。

堀口大學はこれを『幸福の後にくるもの』と日本語に訳した。

出版されてすぐに読んだ私はその時19歳。70年も昔のことである。4巻に纏められた大河小説の3巻目だけが手元に残っている。胸がドキドキするほど夢中で読んだ物語の内容は薄っすらとしか残ってはいないが、私を熱中させたりシャル・ダローという主人公の名前は鮮明な輝きをもって今も胸の底に住んでいる。映画化された「昼顔」も素晴らしかった。

私は少女時代から、物語を読んだり書いたりするのが好きだった。少女小説や、マン

愚かではあっても、自分への尊厳や、
しあわせをもっと追い求めて生きるべきだと思う

岸 恵子 (女優)

大切なひとと愛し愛された記憶が、
もっともかけがえのない経験です。

上野千鶴子 (社会学者)

女性が尊厳を取り戻すには、
ソロリテ (姉妹愛) が欠かせない。

三浦 まり (上智大学教授)

太古の祖先から命が繋がって、
この子に至ったという
感謝の念に満ちたことも確かです。

渡邊 あゆみ (NHKアナウンサー)

フランス人女性は憧れの存在。美しいだけでなく、
モードであり、芯が通った強い女性で、生き様が良い。

コシノ ジュンコ (ファッションデザイナー)